

# ごめん・なはり線

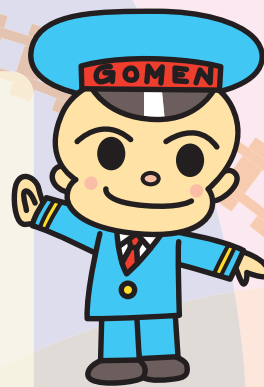
## キャラクター誕生秘話



◎やなせたかし  
◎やなせスタジオ



▲当時の逸話を快活に語ってくれた小松計夫さん



ごめん えきお君

3月31日から、香美市出身の漫画家・やなせたかしさんと暢さん夫妻をモデルにした朝の連続テレビ小説『あなぱん』が放送されています。

物語では南国市が舞台となりましたが、香南市を通るごめん・なはり線には、やなせさんが生前に描かれた駅のキャラクターたちが利用客を出迎えています。今回は、彼らがどのような経緯で生まれたのか、当時から制作に携わり、今もキャラクターの著作権管理を任されている有限会社ユニオン（安芸市）の小松計夫さんにお話を伺い、知られざる創作秘話と、貴重な当時の資料を皆さまにお届けしたいと思います。

担当 広報編集委員 宮崎文敬

## ～あのキャラクターたちはこうして生まれた～

ふとしたきっかけから  
はじまった大企画

ごめん・なはり線が開業する前、安芸市で商工会議所青年部の役員をしていた小松さんは、路線を盛り上げるための勉強会を何度か開く中で、知人の一人が、やなせさんと知り合いであることが判明され、イメージアップに繋がるイラストを依頼できないかと軽い気持ちで提案したそうです。すると、やなせさんは大乗り気でこれを快諾、小松さんが窓口となつて、やなせさんと制作のやり取りをすることになりました。

完成したイラストは、ごめん・なはり線のシンボルマークとして採用予定となつたのですが、やなせさんから「一つだけじゃ面白くない。全部の駅の

キャラクターを描きたい」と提案が上がります。そして、小松さんが沿線の各自治体のパンフレットなど、資料をかき集めて送ると、一週間後には20駅全て（現在は21駅）のキャラクターが、企画意図の説明付きで送られて来たのです。その仕事の速さに小松さんは感嘆しました。

その後、2002年に、ごめん・なはり線は開通を迎えました。やなせさんの手によって創り出された個性あふれるキャラクターたちは、ごめん・なはり線の顔として、列車とともに走り始めたのです。



あかおか えきさん

各町のイメージからキャラクターが誕生

やなせさんは、沿線自治体からイメージするものをキャラクターとして描いています。なんと赤岡町の初期イメージは、どろめ祭りだったようで、「あかおか だろめ君」という名前のキャラクターでした。イラストはお見せできませんが、旧・赤岡町が作成したキャラクター「だろめちゃん」のような、鉢巻をして青い法被を着たデザインでした。

※旧・赤岡町が作成したキャラクターです



▲だろめちゃん（あかおか駅展示室）

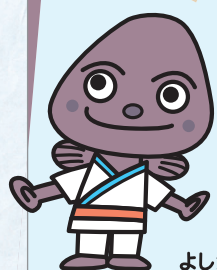
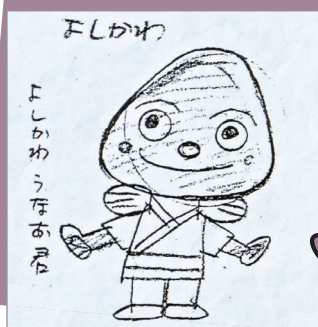
ごめん・なはり線キャラクターの由来を知ろう！

6月29日まで、赤岡町の絵金蔵の土間ホールにて、ものべがわエリア観光博「ものべすと」記念企画として、ごめん・なはり線全21駅のキャラクターを紹介するパネル展示が開催されています。香南市以外のキャラクターの由来も知ることができます。

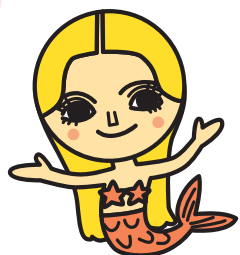
■絵金蔵 ☎577-7117



かがみ みかんちゃん



よしかわ うなお君



やす にんぎょちゃん



のいちどんまん

▲やなせさん直筆のラフ画

その他の香南市内の町は「野市町」「ちんどんコンクール全国大会」、「吉川村」「ウナギの養殖」、「香我美町」「山北みかんの栽培」、「夜須町」「マリノフェスティバルのマーメイドコンテスト」をそれぞれイメージしてキャラクターに描いてくれています。今回、小松さんから、当時のやなせさん直筆の貴重なラフ画を見せていただきました。現在のキャラクターと併せてご覧ください。（上図）

### やなせさんとの交流 そして感じた人柄

小松さんはその後、企画会社の仕事を続けるなか、来高したやなせさんの送迎や宿泊のお手伝いを行い、イベント運営や各駅の立像設置、着ぐるみの製作にも関わるなど、やなせさんが亡くなるまで積極的な交流を続けました。

あかおか駅のキャラクター棟にある展示室には、来高したやなせさんも、実際に足を運んだそうです。

また、暢さんのお父さんが同じ安芸市出身だったことや、偶然にも暢さんと同じ小松姓

だったことも、交流を長く続けられた理由の一つだったのかもしれません。感慨深げに語っていました。

そして、周りに集まってくる人たちに對して、いつも本当にやさしく、気を配る方だったというやなせさんの人柄には、自身の仕事や人生の価値観が変わるほどの影響を受けたそうです。「お手本にしたい人」「人生の生き方の見本のような人」と語ってくれました。亡くなった後も、小松さんの会社だけでなく、さまざまなお店で、やなせさんに関係する仕事が続いていることに對し「天国から仕事をくれていて」と、その影響力の大きさを改めて噛みしめていた様子が、取材を通して、とても印象に残りました。



なは りこちゃん

